

自動車リサイクルの仕組みをつくり 世界に普及させた会社

会宝産業 株式会社

石川県金沢市東蚊爪町1-25
従業員数：80人、海外事業所：タイ／ナイジェリア
／ガーナ／アラブ首長国連邦／シンガポール

自動車リサイクル業は「解体屋」とも呼ばれる。廃車された自動車から残留オイルやフロンを抜き取り、エンジン・部品・タイヤ・座席を取り外し、鉄、アルミ、希少金属など、リサイクルできるものを回収。残ったガラス・ゴム・樹脂などは工業用シュレッダーにかけて、最終的に埋立地に埋める。このとき、リサイクル事業者は埋立処理費を負担しなければならないが、それを回避して、他の産業廃棄物とともに1975年から16年間、不法投棄を続けたのが香川県豊島の事件だった。自動車を製造して世に送り出す産業を動脈産業とすれば、廃車された自動車をリサイクルする産業は静脈産業ということになる。動脈産業だけでは世界中にゴミがあふれる。静脈産業を確立しない限り、持続可能な循環型社会は実現できない。会宝産業会長の近藤典彦^{こんどうのりひこ}さんは、そう考えて、50年にわたってリサイクルのシステムをつくり上げ、そのシステムを全国に、さらに全世界に広げてきた。その歩みとこれからの展望を聞いた。

■自動車リサイクル業の起業

近藤さんは高校卒業後、父が営む金沢の味噌麴業で働いていた。あるとき、父の軽



近藤典彦会長

トラックに無断で乗って事故を起こし、父の怒りに触れ、東京で中古車販売業を営む親戚に預けられた。その親戚から勧められて自動車解体業をはじめ。数年後に父が倒れ、味噌麴業を継ぐよう懇願されたとき、自分の不在中、店を支えてくれた番頭さんに継いでもらうように頼み、自身はあらためて金沢の地で自動車解体業「有限会社近藤自動車商会」を起こした。1969年、近藤さんが22歳の時のことである。

このころ、東京オリンピック（1964）、名神高速道路の開通（1965）、東名高速道

路の開通（1969）などを契機に、日本のモータリゼーションが急速にすすんだ。それとともに自動車解体事業者も増えた。

その実態は、長靴を履かないと仕事にならないような3K職場だった。動かなくなった自動車を次々解体し、売れるものだけ取り出してお金に換える。あとはプレスして燃やしてしまう。環境に与える影響はほとんど考慮されなかった。そんな荒っぽいやり方で、目先の儲けを追いかけているだけでいいはずはない。仕事というのは、もっと地に足をつけたものでなければならないはずだ。そんな思いが次第に大きくなっていった、と近藤さんは言う。

創業の翌年、最初に雇い入れた従業員が、解体作業中に大火傷を負うという事故が起きた。フォークリフトで解体車を持ち上げ、その下で作業しているとき、解体車が突然傾いてガソリンを浴び、引火したのだった。病院に駆けつけた従業員の父親の前で、近藤さんは土下座して言った。「とんでもないことをしてしまいました。今日限りこの仕事を辞めます」。彼の父は「どうぞ頭を上げてください。辞めるなんて言わないでください」と言ってくれた。その言葉で、以後どんなことがあっても従業員を守るといった経営者の責任を強く思うようになったという。

■近藤自動車商会から会宝産業へ

それから十数年を経て、近藤さんは浄土



自動車リサイクル作業風景

真宗の僧、大澤進一師と出会っている。大澤師の説法を聞く中で、いろんなことを教わり、いろんなことを考えた。

人はいつか死んでいく。死ねばすべてが無になる。しかし、その一方で1人は万人とつながっており、さまざまな人から影響を受け、さまざまな人に影響を与えながら生きている。そう考えると、自分の人生は自分のものではない。生きている間に自分自身がどれだけいい思いをしたかではなく、周りの人たちに何を残したか、周りの人たちをどれだけ幸せにしたかが人生のすべてだろう、と考えるようになった。

ある日、大澤師は近藤さんに向かってこう言った。「わたしは仏さまから『近藤さんを育てろ』と言われた。だからあなたを育てるよ。いま、あなたはちょうど人生の半ばまで来た。この辺でこれまでの人生を清算したらどうですか？」

この言葉が何を意味するのか、具体的に何をどうしたらよいのか、大澤師はそれ以上言わなかった。一生懸命考えて、いまのこの仕事で世の中に何かを残すことが自分

の使命だと考えるようになった。何かを残すためには、もっと身を正さなければと思ひ、以来、酒、たばこ、ゴルフ、麻雀…を断った。1984年、37歳の時のことである。

1991年、近藤自動車商会に1人のクウェート人バイヤーがやってきて、大量の中古エンジンと中古部品を買っていった。「これを買う」「あっちのも欲しい」と言って、コンテナ1杯分になった。1個1個の値段は通常の国内価格よりも安かったが、これだけ量がまとまるとかなりの金額になった。要は、中古エンジン、中古部品の需要は、日本国内よりも発展途上国のほうがずっと大きいらしいということがわかった。

翌1992年、近藤さんは大澤師の助言で、会社名を「近藤自動車商会」から「会宝産業」に変えた。宝に会う。「宝」は、従業員、お客様、この仕事を通じて関わりを持ったすべての人たちを指す。これらの人たちとの出会いを大切にしながら、中古エンジン、中古部品を余すところなく生かし切るシステムをつくり、世界中に広げることが経営の目標に据えた。

■ 同業者を結集する

環境問題への関心が、日増しに高まっていった時代だった。1992年、ブラジルで「地球サミット」が開かれ、環境と開発に関する「リオデジャネイロ宣言」を採択。日本では翌1993年に「環境基本法」が制定され、2002年には、「自動車リサイクル法」が

成立した。自動車のリサイクルのコストの負担が、自動車メーカーと自動車輸入業者に義務づけられ、自動車の価格にリサイクルコストが上乗せされることになった。

リサイクルが円滑にすすむには、中古エンジンや中古部品を必要とする人に供給する仕組みが必要だった。発展途上国にはかなりの需要があることがわかっている。そこで、近藤さんは北陸地方の同業者に呼びかけて、中古部品を輸出する共同組合を結成した。

加入組合員から中古エンジン、中古部品を集め、バイヤーと商談して、先方が要望する中古部品を、先方が要望する数だけコンテナに詰めて輸出する。どの組合員が提供した部品をどれだけ選ぶかは、できる限り公平を期して、近藤さんが決めた。しかし、ある組合員が、自分が仕切り役を引き受けると言い出し、近藤さんが彼にその役目を任せると、自社の部品を多く積み込み、会宝産業からの部品は1つしか選ばなかった。そんなことがあって、近藤さんは自分がつくった共同組合からの脱退を決めた。

同じ地域の同業者間では、利害がぶつかり合っとうまくいかない。そこで、もっと広い範囲の同業者との連携を図ることにした。ある経営コンサルタント会社が主催する業種別のリサイクル研究会に参加。メンバーは会宝産業を含め15社。地理的に離れているため利害の対立はなく、高い志を持って広い視野から客観的な議論ができた。

2003年、他のメンバー14社に呼びかけて、NPO法人「RUM (Re-Use Motorization) アライアンス」を設立。近藤さんが代表理事となり、環境保全と自動車リサイクルを啓発する活動をはじめた。

■環境保全と自動車リサイクルの啓発

具体的には、RUMアライアンスとして2005年の愛知万博に参加を申し込み「自動車リサイクルシンポジウム」を開催した。近藤さんのほか7人がパネラーとなり、自動車リサイクルの意義と現状、今後の方向性を訴えた。さらに、各地で「国際リサイクル会議」を開催した。2006年には東京の国連大学で、2008年には金沢市内で、2009年には中国大連で開催し、各国の大使や大使館員に出席を求め、行政や自動車メーカー、リサイクル事業者が国連と協力して、地球レベルの自動車リサイクルを推進することを訴えた。

2007年には会宝産業の敷地に隣接する土地を手に入れて、IREC (International Recycle Education Center: 国際リサイクル教育センター) を開設した。地球環境問題と自動車リサイクルの現状と課題を座学で学び、さらに自動車リサイクルの方法と実技を3週間かけて学ぶ施設で、近藤さんと会宝産業の社員がカリキュラムをつくり講師となって、RUMアライアンスのメンバー企業の社員を順次教育してレベルアップを図った。



倉庫の棚に並んだ中古エンジン

さらにJICA (国際協力機構) の協力を得て、自動車リサイクルに関心を寄せる発展途上国を順次歴訪し、日本の取り組みとIRECの活動を紹介した。その結果、2010年にはブラジル・アルゼンチン・メキシコ・コロンビアの4カ国から14人が来訪し、IRECで研修を受講。3週間の研修の最後には、香川県豊島の資料館を訪問して、廃棄物を適切に処理することの大切さを学んでもらった。

これらの活動の結果、ブラジルではリサイクルのパイロットプラント建設とIRECをモデルにした教育センターの設立が決まり、近藤さんと会宝産業社員が何度も訪問して検討を重ねて、このほどそれらがオープンした。また、インドでは自動車リサイクル工場の建設がすすんでいる。

■KRA システムと

リサイクラーズアライアンス

これら啓発活動と並行して、本業の中古品販売の仕組みづくりにも力を注いだ。中古品の売買は、商品履歴があいまいなために不透明さが付きまっていた。その不透



シャルジャのオークション会場

明さを取り払い、信頼・信用に基づく取引を円滑にすすめるために、5年の歳月をかけて作り上げたのが、K R A (Kaiho Recyclers Alliance) と呼ばれるオンラインネットワークシステムである。

中古部品の1つひとつについて、どんな車種の、何年式の、どんな状態の中古車から取り出した部品か、取り出しに際してどのような処理が施されたか、同じ種類の在庫がどれだけあるか、販売済みの部品は誰に販売されたか…それらの情報をすべて記録してバーコードに集約し、各商品に張り付ける。これによって、中古部品のトレーサビリティを確保し、客観的に品質を表示した。オークションに出品したとき、客観的な値段が付けやすくなり、売りやすくなり、流通が促進された。

K R Aシステムに基づく中古品の品質基準は、当初英国規格協会の「P A S 777」という名称で認定されていたが、後にJ R S

(Japan Reuse Standard) という会宝産業独自の認証制度になっている。

K R Aシステムによる品質表示は、自社のリサイクル品だけでなく、各地のリサイクル事業者にも活用してもらった。K R Aシステムに沿って品質表示された中古品を各地のリサイクル事業者からコンテナ単位で買い集め、アラブ首長国連邦のシャルジャのオークションに出して輸出したのである。後に、シャルジャに会宝産業独自のオークション会場を設立し、そこで取引が成立したものについて、各リサイクル事業者と輸出先が直接取引する形をとり、会宝産業が輸出を代行して、取引額の一定割合を申し受ける形に変えた。

輸出先は90カ国。K R Aシステムに沿って輸出するリサイクル事業者たちは「リサイクラーズアライアンス」と呼ばれ、加入事業者は北海道から沖縄まで現在70社。本年度末には100社に達する見込みである。

■ 皆が儲かる仕組みを

つくったところが生き延びる

こうした取り組みがS D G s (2015年に国連が提唱した持続可能な開発目標) の実現に資するものと認められ、会宝産業は2017年12月、日本企業として11社目、中小企業でははじめてU N D P (国連開発計画) が主導するB C t A (ビジネス行動要請) への加盟が承認されている。

K R Aシステムによって商品の品質と数

量の情報を把握し、自社でオークション会場を運営することで価格情報を把握。その情報を提供することで、国内のリサイクル事業者が儲かる道筋をつけた。いま、グローバル化は極限まですすみ、歪み生まれ、格差が広がって、資本主義経済は縮小段階に入っている。そんな時代に自社だけ儲かる仕組みをつくらうとしてもうまくいくはずがない。皆が儲かる仕組みをつくったところだけが生き延びることができるだろう、と近藤さんは考えている。

近藤さんが考えるこの国のもう1つの課題は農業である。37%といわれる日本の食料自給率は、この国の体制を非常に脆弱なものにしている。次世代のために、改善の

*本稿の執筆に当たっては、近藤典彦著『エコで世界を元気にする!』(PHP研究所刊)を参考にしました。



創業50周年・感謝の集い

道筋をつけるために、企業による計画農業を目指し、羽咋市内で、自動車リサイクルで回収したオイルを燃料とし、IoTを活用して生育環境をコントロールしたビニールハウスの中で、栄養価の高いトマトの栽培をはじめているという。

取材・執筆 山口 幸正 (やまぐち ゆきまさ)

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中